

福島における震災復興のための 生業（なりわい）研究

研究者って どういう仕事？

～ 環境研究の最前線 ～

はじめに: 福島の復興状況と農家の生業

- 2011年の東日本大震災と東京電力第一発電所事故から14年が経過した現在でも福島県の復興と再生は終わっていません。
- 浜通り(太平洋沿岸)の市町村も少しずつ除染やインフラが整い始めており、帰還者や移住者が住み始めています。
- 被災地の一部では、植物工場や農地の規模拡大、スマート農業などの実証研究もおこなわれています。
- しかし、故郷に戻っても、14年前と同じような生活ができない方々がほとんどです。
- 帰還した農家は、農業を再開するか離農するか苦悩しています。それは、農業による環境管理にも影響を与えます。
- 帰還した農家は、経営ではなくても「生業にある自給的な農業」＝「家庭菜園」などを楽しみとして農作物を栽培しています。
- こうした中で、「農家の生業」に着目して、小さな農業を守ることから農地周辺の環境維持と復興を考えます。

研究結果: 農家の生業についての2事例

研究① 川内村における高齢農家の家庭菜園によるハウスブドウの栽培事例

- 高齢農家と自給的農業(図1)
- 地域農業再生
→ 非経済の仕事の存在も必要
- 高齢農家→体力が続く限りは農作業をしたい: この力を単に労働力と考えず
→ 地域農業の活力と考える
- 高齢農家の「楽しみ」を肯定
→ 過疎対策をになるかもしれない
- 自給的農業は、生業であり農環境の管理や保全、地域社会の存続に貢献
- ハウスブドウ栽培の取り組み
- 栽培のきっかけと発展
→ 栽培と自家消費の楽しみ・家庭菜園から販売作物へと発展している

- 農作業、贈与、小遣いの楽しみ
→ 「生きがい」を得ている
- 結論: 高齢農家は食料生産を担いつつ、楽しみの農業を実践するという農業経営と自給的農業の連続性を持っていると考えられます。
今を「いきいき」と生きる高齢農家: 本質的に豊かで魅力ある地域社会を創生に貢献する可能性があります。



図1、川内村のハウスブドウ栽培の様子

研究② 二本松市東和地区における地元農家と新規就農者の家庭菜園とお裾分け文化の違い

- 生業に関して、両者間の家庭菜園に差異がある
- 地元農家は家庭菜園で農作物栽培→「お裾分け」→親類や地域住民との文化的交流を図っています。
- 豊かな地域ではなかった→お裾分けはコミュニティ内の互助的な役割を果たして、今もこの地区の文化的交流はおこなわれています。
- 新規就農者は経営作目に注力し家庭菜園などを作る余力はない→地元農家からのお裾分けなどにはありがたく貰っています。
- 農作業で両者が交流する機会→関係性は希薄ではありません。
- 地域に残る互助の考えが生かされており、新規就農者を排他的に扱うことはせず、積極的にコミュニティ文化へ取り入れようとしています。
- 農産物の交易の関係性: お裾分けは、地元農家から新規就農者への一方的になっています。
- 結論: お裾分けなど文化的交流の課題: 新規就農者との双方向的な文化的交流にしていくことが必要と考えられます。
新規就農者も真の意味で農村コミュニティの住民になる→地域コミュニティの維持、再生にとって重要な役割を果たす可能性があります。



図2、東和町の新規就農者の農地
耕作放棄地からキュウリの栽培を目指している

発表者氏名 大和田 興(福島地域協働研究拠点 地域環境創生研究室)

- ・ 博士(農学)。趣味は自動車整備と音楽鑑賞。人文社会系農学の農業経済学、農村社会学を専攻。大学研究員、県農業試験場などを経て現職。
- ・ 地域農業や里地里山での生活を守るためには、農学だけではなく環境分野も取り入れた研究が必要だと感じたことが入所のきっかけ。
- ・ これまで300戸以上の農家調査をし、フィールドワークが研究の中で一番楽しい時間。

* 共同研究者: 辻 岳史

